

目的 和服の着用に際し、和服の種類と着用場面との間には、社会的なしきたり、すなわち規範が存在している。しかしながら、この規範に対する意識は色々な要因、例えば年齢、地域などにより異なることも考えられる。そこで、女子大生とその母親を対象にして、和服の種類と着用場面に関する規範意識を中心に検討した。

方法 (1)和服に関する態度や意識について、35の質問項目を選定し、5段階尺度(そう思う～思わない)を用いて評定させた。評定結果をもとに因子分析(主因子法)により基本的因子を抽出し、因子得点から各基本的因子のタイプの人を選定した。(2)和服の種類(振り袖, 小紋, 紬など8種類)と着用場面(親族の結婚式, パーティ・謝恩会, お茶会など15場面)について、和服着用のふさわしさを4段階尺度(ふさわしいと思う～ふさわしくないと思う)を用いて評定させた。(3)和服の規範意識について、人のタイプによる違い、母親と学生による違いを検討した。なお、被験者の有効回答数は学生168名、母親99名である。

結果 和服伝統や規範重視志向の人は、他の人に比べて小紋、色無地、訪問着を、それぞれ限定した着用場面に、よりふさわしいと考えている。また、和服伝統や規範志向、和服ステータス・豊かさシンボル志向、和服実用性・経済性志向などの因子は、学生、母親の両グループとも基本的因子として抽出された。なお、規範については、学生より母親の方が重視する傾向が強かった。

付記：本研究には共立女子大学、被服学科昭和60年度卒業生福地淑美さんの協力を得た。